

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03066

研究課題名(和文) Embodied Human Scienceの構想と展開

研究課題名(英文) Embodied Human Science: Ideas and future development

研究代表者

田中 彰吾 (Tanaka, Shogo)

東海大学・現代教養センター・教授

研究者番号：40408018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「身体性人間科学(embodied human science)」の理論を新たに構想することにある。身体性人間科学とは、現象学にもとづく人間科学に対して、身体性認知のパラダイムを持ち込んだものである。助成期間中に主に取り組んだのは、(a)身体行為に基礎づけられた自己、(b)自他間の身体的相互行為に支えられた社会的認知と他者理解、を理論的に解明する作業である。一般向けの主な成果として『生きられた私をもとめて』(北大路書房、2017年)を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代以降、主要な心の科学(心理学、認知科学、神経科学など)では「身体性(embodiment)」の重要性が広く認識されるようになり、「身体性認知」と呼ばれる新たなパラダイムも成立した。本研究は、このパラダイムをさらに推進し、「心の科学」にとどまらず、心身全体を射程とする「人間科学」を構想することを目的としたものである。研究期間中は、以下の二点を理論的に解明することを試みた。(1)われわれが無自覚に遂行するスキルフルな身体行為に基礎づけられて成立している「自己」、(2)非言語的コミュニケーションも含め、自己と他者のあいだで展開される相互作用にもとづく「社会的認知」および「他者理解」。

研究成果の概要(英文)：This research project was intended to propose the basic theories of the embodied human science, which brings the paradigm of embodied cognition into the phenomenology-based human sciences. During the funding period, we attempted to mainly explicate (a) the self that is founded on the embodied actions, (b) the social cognition that is founded on the embodied interactions between self and others. The single-authored book titled "In search of the lived self" (Tanaka, 2017) represents the major research results for the lay people.

研究分野：人間科学

キーワード：身体性 人間科学 現象学 身体性認知 身体化された自己 身体化された間主観性 身体図式 間身体性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

英語で「Human Science」と呼ばれる研究領域が存在し、北米とヨーロッパを中心にこれまで半世紀近く研究が推進されてきた。直訳すると「人間科学」になるが、日本で人間科学と呼ばれる研究分野とは必ずしも重ならない。主な違いは、前者では人間研究に携わる諸分野(教育学・心理学・看護学・認知科学・精神医学等)において、現象学と解釈学をその方法とする応用研究が行われている点にある(日本では各種の方法論が並立して人間科学を形成している)。

本研究課題の代表者は、現象学的身体論をみずからの方法として研究を進めてきたため、現象学に隣接する「身体性認知(embodied cognition)」を基盤とする Human Science を新たに構築したいと考えた。身体性認知は、知覚・感情・記憶・思考など、ひとの認知活動が身体性によって下支えされているという観点に沿って認知過程を理解する立場である。本研究課題は、身体性認知から出発する人間観を新たに「Embodied Human Science」として確立するべく構想されたものである。

代表者は、本研究が始まる直前の三年間、「間主観性領域における身体知の機能を解明する現象学的・実験的研究」(平成 24-26 年度、基盤研究(C)、課題番号 24500709)と題する別の課題に取り組んでいた。その成果によると、もっとも基礎的な他者理解(社会的認知)は、他者の行為にともなう意図を直接的に知覚することから始まる。自他の身体には互いの表情やしぐさに同調する潜在的傾向が備わっており、他者の身体的状態を自己の身体において鏡映的に反復しうることが、他者の意図の直接知覚を可能にする身体的基盤として機能している(Merleau-Ponty, 1945, 1951)。そして、自己と他者が互いの行為の意図を理解しつつ相互行為を重ねてゆく過程で、身体的な間主観性が生成する(図 1 を参照)。

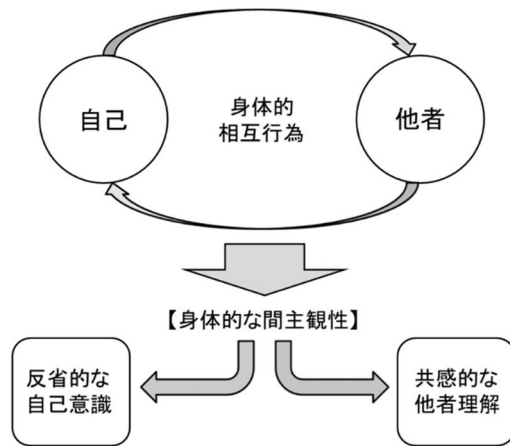


図 1：身体的な間主観性

このような二人称的な自己 - 他者関係が根底にあって、そこから明示的な自己意識や他者理解が成立してくるのだとすると、この点を Embodied Human Science の根幹に据えて、人間科学の基礎理論を展開すべきであると考えた。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は「Embodied Human Science の構想と展開」と題して開始された。研究目的としたのは、大別して以下三つの研究課題を解明することである。

(1) 間身体性にもとづく社会的認知と間主観性の理論構築

メルロ＝ポンティの間身体性の概念を展開して、身体的な間主観性の理論モデルを構築すること。メルロ＝ポンティは、彼以前の時代の主要な考え方であった「類推説」を廃して、他者理解の理論を再構築しようとした。類推説は、自己の心的状態と身体的表出の関係を他者に対して類比的に投射し、直接に観察される他者の身体的表出から他者の心的状態を推測できるとする考え方である(例：私は悲しいときには泣くのだから、他者が泣いているとすればそれは他者が悲しんでいるということの意味するだろう)。

メルロ＝ポンティによると、類推説は、「自己の心」－「自己の身体」－「他者の身体」－「他者の心」という四項関係から他者理解を説明するモデルになっているが、発達の初期まで遡って考えると、乳幼児はこのような世界を生きてはいない。そもそも乳児は自己の顔や身体を外側から観察したことがないのであって、自己の特定の心的状態が、特定の身体的表出に対応しているということを明示的には理解していない。にもかかわらず、大人の表情や発声や身体運動などを共鳴的に模倣するのである。乳児が示す伝染泣きやつられ笑いとして表出するような、自己の身体と他者の身体のあいだに潜在する共鳴的な関係性をメルロ＝ポンティは「間身体性(intercorporéité)」と呼ぶ。

間身体性が共鳴的な模倣として表出するのだとすると、(a)他者の身体を知覚すると、他者の行為が自己の身体を通じて共鳴的に表出する、(b)自己の身体を知覚すると、他者の身体において自己の行為が共鳴的に表出する、という感覚運動的で知覚-行為循環的な回路が自他の身体に潜在していることになる。類推説の四項関係は、自己と他者の分離、心と身体との分離を暗に前提としているが、間身体性は心と身体との非分離、自己の身体と他者の身体との感覚運動的な結合を示唆している。このような感覚運動的かつ相互行為的な関係を出発点として、社会的認知と間主観性の理論を構築する必要がある。

(2) 「反省的な自己意識」の生成過程の解明

身体的な間主観性から、どのように自己が自己として成立するのかをモデル化する。近年の現象学的身体論や身体性認知科学では、いわゆる「ミニマル・セルフ」にもとづく自己の研究が盛んになされてきた(Gallagher, 2000 を参照)。そこでは、行為する身体において、最小限の前反省的な自己感がつねに成立していると主張され、その自己感は主に身体の「所有感(sense of

ownership)」と行為の「主体感 (sense of agency)」から成ると整理された。また、所有感についてはラバーハンド錯覚が、主体感についてはインテンショナル・バインディングが実験パラダイムとして用いられ、実験心理学および認知神経科学的な解明が進められてきた。

本研究は、ミニマル・セルフ論が対象とする「前反省的自己感」が、いかにして前反省の状態を脱して「反省的自己意識」へと至るのか、という点についての解明を試みる。そのさい、本研究では、身体性に基盤を持つ最小限の自己意識が前反省の状態を脱して反省的自己意識として成立するうえで、他者の身体との関係が必要であるとの仮説的見通しに立つ。反省的な自己意識とは、「私が私を意識する」という再帰的な意識であり、この意識には「私と私でないもの」との差異、すなわち他者性が必ず織り込まれている。反省的な自己意識が問われる場合、従来の現象学では、身体から出発すると他者が登場せず（メルロ＝ポンティ）、他者から出発すると身体が登場しない（レヴィナス）、というジレンマがあった。

これに対して、本研究では、自己の身体が他者によって知覚される場面に定位して、反省的な自己意識の生成過程をモデル化する。具体的な題材とするのは身体イメージと自己鏡像認知の発達過程である。

(3) 「共感的な他者理解」のモデル構築

ここで言う「共感 (empathy)」は、「他者の立場に身を置いて他者の心的状態を理解すること」を指す。従来の認知科学では、このような心的過程は「シミュレーション」として理論化されてきたが、シミュレーション説には身体性が欠如している。他者はそもそも、自己とは異なる身体を持ち、自分のいる「ここ」とは異なる「そこ」から、周囲の環境を知覚している。共感が、「相手はこう感じているだろう」という自己の側の単なる想像を超えて、相手の心的過程に迫るものであるには、相手の身体的過程に寄り添っているかどうか内実を分けると思われる。すなわち、「相手の置かれている状況で自分ならこうするだろう」ではなく、「相手の置かれている状況で本人ならこうするだろう」と理解するのに、身体性が鍵を握っているとの見通しを立てた。

フッサールは、身体性に始まる共感のあり方について、「自己移入 (Einfühlung)」という概念で論じている。それは次の論理で展開する。「ここ」に自己の身体があり、目に見える「そこ」に、この身体とよく似た別の身体がある。そこにあるもうひとつの身体は、私と同様に、ある主体性を備え、何かを感じ、考えているだろう。その身体で生じていることを、私は自己移入を通じて理解する。本研究では、先行研究を参照しながら、フッサールの自己移入論を改めて整理することを目的とした。他方で、この議論を、認知科学の「心の理論」研究におけるシミュレーション説と対比しつつ、身体性が他者理解において果たす役割について解明する。シミュレーション説は、ミラーニューロン研究と結合することで、「身体的シミュレーション」という見方を形成しつつある (Gallese, 2013)。これを検討して過去の説との違いを明確にしつつ、フッサールの感情移入論との異動も理論面から検討する。以上により、本研究に独自の共感的な他者理解モデルを構築することを目指した。

3. 研究の方法

上述した三つの研究課題それぞれに合わせて、以下のように研究方法を設定した。

(1) 間身体性にもとづく社会的認知と間主観性の理論構築：メルロ＝ポンティが間身体性論を残した主なテキスト『哲学者とその影』および講義録『幼児の対人関係』を手がかりとして、間身体性概念を理論的に整理し、それを現代の科学的な心理学研究と接続することを試みた。メルロ＝ポンティの没後、発達科学や神経科学において、彼の理論に呼応するような新たな発見が複数見られる。間身体性の概念をこれらと結びつけることで、間身体性を新たな間主観性の理論として編成し直すことを目指した。

(2) 「反省的な自己意識」の生成過程の解明：乳幼児の発達過程についての科学的知見を検証することで、自己鏡像認知と身体イメージの形成過程を理論的に踏み込んで解明することを試みた。「反省」は自己自身について外部のパースペクティブから表象する能力を必要とする。この認知能力は、身体性のレベルでは身体イメージを形成する能力（外部の視点から全身を表象する能力）とほぼ等価のものと言ってよい。身体イメージを形成する認知が発達上どのような身体経験に由来するのか、という問題意識に沿って、発達科学の知見を整理することを試みた。

(3) 「共感的な他者理解」のモデル構築：自己移入（共感）をめぐるフッサールの議論を、『デカルト的省察』と『間主観性の現象学』を参照して整理することを試みた。その一方で、認知科学におけるシミュレーション説、とくに、ミラーニューロンの作用を組み込んでガレーゼが新たに展開している身体的シミュレーション説と比較した。また、もともと他者の身体に向かって自己移入する能力は、自他の身体のパースペクティブを交換する経験に由来するだろうと想定し、反省と共感の互換的關係について、理論的に整理することを試みた。

4. 研究成果

(1) 間身体性と間主観性

メルロ＝ポンティのテキストを検討することで確認できたのは次のことである。間身体性は、自己の身体と他者の身体のあいだに潜在する関係性であり、それは、共鳴的な模倣を通じて表出する。この関係は、図のように、自己と他者のあいだの知覚-行為循環という形式的な特徴を備えている。たとえば自他間で微笑みが伝播する場面為例に取ると、他者が微笑むのを見ると、それと同じ表情が自己の顔において表出するという関係である。このように、他者の身体を知覚す

ると、それに呼応する行為（またはその可能性）が自己の身体で共鳴的に反復されること、また逆に、自己の身体を知覚すると、それに呼応する行為（またはその可能性）が他者の身体で表出することが、間身体性の構造である。

メルロ＝ポンティの没後に開花した科学的研究には、間身体性に呼応する知見がいくつもある。第一に、新生児模倣（Meltzoff & Moore, 1977）である。新生児は生後間もない段階であっても、大人が見せる特定の表情を模倣する能力を持っている。第二に、ミラーニューロン（Di Pellegrino et al., 1992）である。ミラーニューロンは当初サル運動野の研究で見つかったもので、他者がある行為をするのを見ているときも、自分がある行為をしているときも、鏡映しのように腹側運動前野の特定のニューロンが同じように反応する。第三に、情動の伝染（Hatfield, 1993）である。対人場面で無自覚に表情が伝播する場面では、その表情にともなう情動が自他間で伝染するように共有される。これらの研究は総じて、自己の身体と他者の身体のあいだに、感覚運動レベルで共鳴する潜在的関係があり、それが他者の行為の意図や感情状態を理解するうえでの身体的基盤になっていることを示唆している。

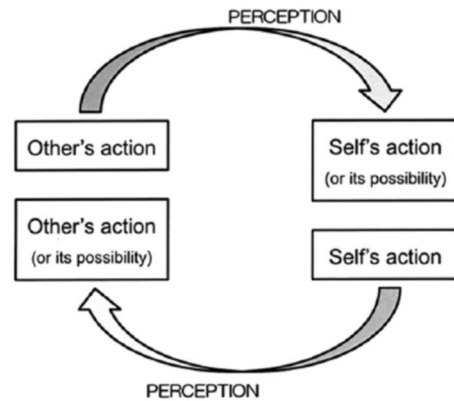


図2：間身体性（Tanaka, 2015）

以上の発見は、やや角度を変えて見ると、社会心理学における非言語コミュニケーション研究とも整合性がある。対人場面での言語的コミュニケーションを円滑に進める機能を持つものとして、表情やジェスチャーなどの非言語行動が大きな役割を果たしていることは1970年代から指摘されてきた（Kendon, 1970; Condon & Sander, 1974 など）。間身体性が示唆しているのは、そのような非言語行動の「同期（synchrony）」および「同調（matching）」として表出する自己の身体性が、他者理解のもっとも基礎的な身体的次元を構成しているということであろう。

従来、非言語行動の同期と同調はその機能が明確に区別されずに論じられてきたが、間身体性の観点からするとその区別が可能であることを本研究の成果では新たに指摘した（Tanaka, 2015）。類似する身体行為が自他間で同調して出現する場合、何らかの対象を志向する表情やジェスチャーが共有されるということであり、身体的志向性が同期して追体験されることを意味する。したがって、非言語行動の同調は、暗黙の共鳴的模倣を通じた原初的な共感の経験であると考えられる。他方、非言語行動の同期は、自他間でちょうど良いタイミングで身体表現が時間的に噛み合って進行することであり、暗黙に「相手への応答」という性質を持っている。

こうして、間身体性は、自己と他者の社会的相互作用の場面において、非言語行動の同期と同調として生じ、他者理解の基礎となるだけでなく、言語的相互作用を支える社会的文脈を形成する。フックスらが「エナクティブな間主観性」という概念で提唱している通り（Fuchs & De Jaegher, 2009）、身体的な相互行為が自己と他者のあいだで一定の水準で維持されることで、自己と他者の「あいだ」が自律性を持つ社会的な場として形成される。

本研究では、間身体性から出発して形成される「あいだ」の機能について、日本の哲学者である木村敏のあいだ論を援用しつつ分析した（Tanaka, 2017）。それによると、自己と他者の身体的相互行為が生み出す「あいだ」は、即興での音楽の合奏の経験のように、互いに繰り返す行為と言葉が同期と同調を繰り返しながら進行することで形成される。いちど形成された「あいだ」はそれ自体で一定の自律性を帯び、互いの行為を予測する新たな規範として作用し始める。この規範は、その場に参加する主体の行為を引き出す創造的な力として作用すると同時に、その場に協調して行為させる拘束的な力としても作用する。ただし、いずれにしても、自他間で形成される「あいだ」が規範となり、社会的な文脈となることで、間主観的な他者理解がより豊かに分節されていく。この点で「あいだ」はより複雑なニュアンスに満ちた他者理解の源泉である。

(2) 反省的自己

身体イメージは一般に、自己の身体についての心的な画像のことを言うが、これを描画すると大半の者が正面から見た自己の身体の全身像を描く。なぜ、そもそも自己の身体イメージが正面のパースペクティブから表象された全身像になるのか、従来の研究では十分に問われてこなかった。本研究では、このパースペクティブの問題を、自己鏡像認知の発達過程に重ね合わせて理論的に解明することに取り組んだ（田中, 2017, pp.50～）。

自己鏡像認知について調査した関連研究によると、(a)チンパンジーは一般に鏡像認知が可能であることが多く、鏡を経験したことのない野生のチンパンジーを対象にしてもその能力には優位な差がない（Povinelli et al., 1993）。(b)他方で、チンパンジーを群れから引き離して単独で飼育すると、鏡を見ても特別な反応を示さず、自己像を鏡に見出すこともない（Gallup, 1970）。そもそも、鏡像を見たときにそれを「自己の身体」として認知するには、鏡に向かって投射される自己身体のイメージが先行して形成されていなければならない。チンパンジーをめぐるこれらの研究は、鏡像認知の前提となる身体イメージがもともと単独で生活する状態では形成されないことを示唆している。

これは、次のような発達過程を示唆するだろう。哲学者のマッハがかつて指摘した通り、「自己の身体」においては眼球が頭部に固定されており、厳密には、その視点から知覚できる自己の

身体しか経験できない (Mach, 1897)。その意味で、自己の身体の視覚像にはつねに頭部が欠けている。しかし、自己は、発達の過程で他者とのあいだで「見る - 見られる」という身体的相互作用を繰り返すなかで、「他者から見られる自己の身体」を自覚することができるようになる。他者の身体が全身像として頭部を備えているのと同様に、自己の身体もまた他者の視点から見るができるなら、他者と同様に頭部を備えた全身像を形成しているだろう。おそらく、このような了解の過程を経て、自己の身体イメージが形成される。そのため、大半の身体イメージは、他者の視点を仮想的に取得した状態で、正面のパースペクティブを借りて表象されるのである。

このように、他者の視点から自己の身体を見る、という想像が働くことが、「自分で自分を見る」という視覚 - 想像の能力を支えており、ひいては、「私が私を意識する」という反省の原初的経験を導くものと思われる。メルロ＝ポンティは、自分で自分に触れるという触覚的経験を反省の原型的経験と考えたが (Merleau-Ponty, 1945)、身体イメージに沿って考える限り、それより古い経験がある。自分で自分に触れるとか、自分で自分を見るという知覚以前に、そうした知覚を動機づける「他者に触れられる経験」「他者に見られる経験」が必要なのである。自己の経験を自分で振り返る「反省」という認知は、他者に知覚されるという社会的経験を経ることで、はじめて構成される能力だと言える。

(3) 共感と他者理解

フッサールのテキストを検討することで、フッサールの自己移入論に特徴的な構造を明らかにすることができた。自己移入は、自己が他者の身体に出会うことから始まる。現象学的還元の手続きを経て、自己の知覚野に現れる他者の身体は、他の物体一般と同様にひとつの物体として知覚される。しかし、共現前という類比的な統覚の作用を通じて、自己の身体と同様にひとつの生きた身体として認識される。「ここ」にある自己の身体に対して、「そこ」に知覚される他者の身体は、私が自己の身体を通じてそうしているのと同じように、ある主体性を備え、何かを感じ、考えていることだろう。もちろん、他者の主観性は根本的に他なるものであって、他者に対して現れている志向的世界が、それと同様のしかたで私に対して与えられるわけではない。にもかかわらず、私は、「そこ」にある他者の身体に対して現れている世界を、一種の志向的変様として、擬似的に現出するものとして経験することができるだろう。自己移入による他者理解は、おおよそのこのように進行する過程である。

本研究では、他者の身体が自己の知覚野に出現する過程について、フッサールとは異なる理解にたどり着いた。フッサールは、共現前の作用の最初の段階に「対化 (Paarung)」があるという。対化とは、他者の身体が自己の身体と対になり、自己の身体から「生きた身体」という意味づけを与えられる過程である。つまり、フッサールにおいては、「他者の身体」という意味は、自己の側から投射的に付与されるのであって、最初から「生きた身体」として現れてくることがないかのように記述されている。

しかしながら、本研究の成果となる論文で指摘した通り (Tanaka, 2019)、他者の身体が「他者の身体」として現れてくる最初の段階は、「見られている」「触れられている」といった経験のように、自己の身体が他者によって知覚の客体にされる場面にある。見られていることに気づくときや、触れられていることに気づくとき、他者は私の身体を客体にする力を持った存在として私に感知されるのであり、私は、自己の身体が客体化されていることを通じて、「他なる主体」が自己の身体の向こう側に「他者の身体」として現れていることに気づくのである。ここには、対化のように、自己の側から投射的に「生きた身体」という異議を他者に与える段階は存在しない。他者の身体は、最初から「生きた身体」として現れるのである。このような理解は、フッサールの自己移入論だけでなく、シミュレーション説とも異なっている。

他者の身体が現前することに気づくとき、自己は他者に知覚されるという受動的経験を経ている。先に指摘した通り、自他の間で経験される「見る - 見られる」「触れる - 触れられる」という知覚的相互作用が、自己反省という認知能力に発達の先立っている。それと同様に、「見られる」「触れられる」という受動的経験に気づくことが、他者に対して自己移入する共感という認知能力に先立っている。その意味で、共感とは自己反省の裏返しであり、社会的に拡張された反省 (socially extended reflection) である。

以上のように考えると、間身体性とはやや異なるルートを介した社会的認知と他者理解を理論化する必要がある。間身体性は、自己の身体と他者の身体が互いに行為主体 (エージェント) として経験する次元を出発点としていた。しかし、反省と共感はいずれも、自己の身体が他者によって知覚される経験にその基礎がある。つまり、主体としての身体ではなく「客体としての身体 (body-as-object)」に媒介される社会的認知の能力なのである。「客体としての身体」に関連して生じる社会的認知は、共感だけに限定されない。恥、誇り、社会不安など、さまざまな情動の経験にも密接に関連している。本研究ではとくに、客体としての身体によって引き起こされる社会不安の経験について、独立した論考を執筆した (Tanaka, in press)。

(4) その他：身体化された自己

本研究計画が開始したのと同時期に、出版社から依頼があり、「自己」をテーマにして単著を執筆することになった。本研究の成果を発信する好機と考え、「身体化された自己 (embodied self)」を主題として単著全体の議論を展開した。メルロ＝ポンティの自己論を中心に据え、身体化された主体としての「I」について、本研究の成果である反省的自己や社会的認知との関係も踏まえながら多角的に論じた単著を出版することができた (田中, 2017)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Yochai Ataria & Shogo Tanaka	4. 巻 43
2. 論文標題 When body image takes over the body schema: The case of Frantz Fanon	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Studies	6. 最初と最後の頁 online-first
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1007/s10746-020-09543-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 19(5)
2. 論文標題 対話する身体 - 生きた経験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 529-532
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中彰吾・浅井智久・金山範明・今泉修・弘光健太郎	4. 巻 90(5)
2. 論文標題 心身脳問題 - からだを巡る冒険	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 520-539
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.90.18403	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 70(3)
2. 論文標題 身体性哲学からみたeスポーツ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 190-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 25
2. 論文標題 What is it like to be disconnected from the body?: A phenomenological account of disembodiment in depersonalization/derealization disorder	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Consciousness Studies	6. 最初と最後の頁 239-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Bodily basis of the diverse modes of the self	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Human Arenas	6. 最初と最後の頁 223-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s42087-018-0030-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 26
2. 論文標題 プロジェクト科学における身体役割 - 身体錯覚を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 140-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 27
2. 論文標題 Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Theory & Psychology	6. 最初と最後の頁 337-353
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0959354317702543	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 2017 Special Issue
2. 論文標題 The body as the intersection between individuality and collectivity	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Civilizations	6. 最初と最後の頁 128-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 25
2. 論文標題 拡張した心を超えて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人体科学	6. 最初と最後の頁 77-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 21
2. 論文標題 不可逆な時間を生きる人間 - 「文化心理学ワークショップ」報告	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 文明	6. 最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 27
2. 論文標題 Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Theory & Psychology	6. 最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0959354317702543	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 25
2. 論文標題 Intercorporeality as a theory of social cognition	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Theory & Psychology	6. 最初と最後の頁 455-472
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0959354315583035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shogo Tanaka	4. 巻 20
2. 論文標題 Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 文明	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 20
2. 論文標題 復興のランドスケープ - 東日本大震災後の防潮堤建設を再考する	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 文明	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Hirano, Nobutaka Kutsuzawa, Shogo Tanaka	4. 巻 20
2. 論文標題 Special Issue: Civilization Dialogue between Europe and Japan	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 文明	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中彰吾	4. 巻 20
2. 論文標題 国際シンポジウム「Civilization Dialogue between Europe and Japan」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 文明	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計47件 (うち招待講演 24件 / うち国際学会 23件)

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Body image as a product of interactions between the self and the other
3. 学会等名 38th International Human Science Research Conference (Molde, Norway) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 元型的心理学と現象学の違いをどう考えるか?
3. 学会等名 立正大学哲学会・2019年度春夏大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ナラティブ・アイデンティティと現象学的研究
3. 学会等名 心の科学の基礎論研究会 (第85回) & エンボディーアプローチ研究会 (第8回)・合同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Motor learning and body schema/image distinction
3. 学会等名 Workshop: Radical Embodied Cognition (Tokyo, Japan) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ふり遊びとプロジェクション
3. 学会等名 日本認知科学回第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体性哲学からみるeスポーツ
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 現象学的認知科学の可能性
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ナラティブ・セルフへのエンボディーアプローチ
3. 学会等名 自他表象研究会(第50回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 On the normativity that emerges through embodied social interactions
3. 学会等名 Workshop on phenomenology at the Institute of Philosophy (Prague, Czech) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ポスト身体性認知としてのプロジェクション概念
3. 学会等名 プロジェクションフォーラム・第9回定例研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Intercorporeality and Aida: An alternative view of social understanding
3. 学会等名 International Society for East Asian Philosophy 2019 Conference (Tokyo, Japan) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 A negative legacy of modernization
3. 学会等名 4th Dialogue between Civilizations (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 自己はどこまで脱身体化できるか?
3. 学会等名 先導的人文学・社会科学研究推進事業「アイデンティティの内的多元性」第1回公開シンポジウム「自己をめぐる冒険」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Understanding the symptoms of Taijin Kyofusho from an embodied perspective
3. 学会等名 International Workshop on Philosophy of Psychiatry (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ナラティブ・セルフの概念から考える質的研究
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回全国大会・シンポジウム「ナラティブを通じた他者理解」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 運動学習における身体イメージの役割を再考する
3. 学会等名 第19回認知神経リハビリテーション学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 現象学と現代心理学の界面
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会・シンポジウム「もう一つの心理学史を求めて：近代心理学と現象学」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Body, self and the other in Taijin Kyofusho (TKS)
3. 学会等名 Time, the Body, and the Other: Phenomenological and Psychopathological Approaches（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 What is subjectively experienced in full-body illusion experiments?
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 “ My body ” as a product of interactions between the self and the other
3. 学会等名 37th International Human Science Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Reconsidering the symptoms of Taijin Kyofusho (TKS) from an embodied perspective
3. 学会等名 Lecture at the Department of Psychology, National Taiwan University (Taiwan) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 The lived body and motor learning: Refining Merleau-ponty ' s notion of body schema
3. 学会等名 Lecture at the Department of Counseling & Clinical Psychology, National Dong Hwa University (Taiwan) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Body schema and body image in motor learning: Refining Merleau-Pontian notion of body schema
3. 学会等名 International Symposium: Body Schema and Body Image (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 現象学的心理学と社会構築主義 (Phenomenological psychology and social constructionism)
3. 学会等名 国際シンポジウム「社会構築主義と臨床の現場」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Exploring the symptoms of Taijin Kyofusho (TKS) as an embodied experience
3. 学会等名 3rd Dialogue between Civilizations, Symposium: Embodiment, Culture and the Self (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 20世紀人文思想における身体を振り返る
3. 学会等名 東海大学文明研究所「20世紀人文学の方法論的再検討」(第6回)・「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities)構築に向けた基礎研究」合同研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 身体とプロジェクション - 錯覚から考える
3. 学会等名 認知科学会・冬のシンポジウム「跳び出す心, 拡がる身体: プロジェクション・サイエンスの確立に向けて」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 離人・現実感喪失における自己と身体
3. 学会等名 第47回PPP研究会(精神医学と心理学の哲学研究会)(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Taijin Kyofusho and the self in Japanese culture
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of The International Society for Theoretical Psychology, Workshop "Alternative concepts of self, body and mind from contemporary Japanese perspectives" (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Narrative self and its implications for human sciences
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of The International Society for Theoretical Psychology, Symposium "Focusing on the narrative self in human sciences" (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Psychological experiments as a sort of imaginative variation
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of The International Society for Theoretical Psychology, Symposium "Quest for new methods in phenomenological psychology" (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Bodily basis of subjectivity and intersubjectivity
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of The International Society for Theoretical Psychology, Symposium "Locating the bodily borders of individuality" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Self and body in depersonalization/derealization disorder
3. 学会等名 Research Colloquium: Philosophy, Psychiatry, Psychosomatic (University of Heidelberg, Germany) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Depersonalization and full-body illusion: A comparative study of the sense of self
3. 学会等名 Symposium: From Body to Self in Virtual Reality (Interdisciplinary Center Herzliya, Israel) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 ミニマル・ナラティブ・インタラクティブ - 自己を考える3つの観点
3. 学会等名 自他表象研究会 (第11回) (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Embodiment and interaction: Two moments of self-awareness
3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Contributed Symposium "In search of the self: Embodiment and interaction" (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective
3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Invited Symposium "An integrative study on the concept of self, body and mind: Beyond the dichotomy of East and West" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Perception and sensation: A reply to Tom Sparrow's text
3. 学会等名 Workshop: End of Phenomenology and Speculative Realism (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 What is it like to be disconnected from the body? : A phenomenological account of depersonalization/derealization disorder
3. 学会等名 Kitchen Seminar (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 The body as the intersection between individuality and collectivity
3. 学会等名 2nd Civilization Dialogue between Europe and Japan (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中彰吾, 長尾秀行
2. 発表標題 いいコミュニケーションは鏡うつし: 身体の同期と同調に着目して間主観性を可視化する
3. 学会等名 第11回日本感性工学会春季大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田中彰吾, 浅井智久
2. 発表標題 他者感へのエンボディード・アプローチ
3. 学会等名 日本心理学会第79回大会, シンポジウム「他者感へのエンボディード・アプローチ」
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 道徳へのミニマルなアプローチ
3. 学会等名 道徳心理学コロキウム, 第8回ワークショップ「自己と道徳: 感情と身体の観点から」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective
3. 学会等名 1st Civilization Dialogue between Europe and Japan (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Shogo Tanaka
2. 発表標題 Embodying the other mind
3. 学会等名 Kyoto Conference 2015: Beyond the Extended Mind (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 他者感の概念について
3. 学会等名 第2回自他表象研究会 (招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 田中彰吾
2. 発表標題 自己の身体と他者の身体
3. 学会等名 第6回自他表象研究会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 Olga Louchakova-Schwartz (Ed.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer Nature	5. 総ページ数 339
3. 書名 The Problem of Religious Experience: Case Studies in Phenomenology, with Reflections and Commentaries (Chapter 2: Reconnecting the self to the divine: The role of the lived body in spontaneous religious experiences, Shogo Tanaka)	

1. 著者名 W. J. Silva-Filho & L. Tateo (Eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer Nature	5. 総ページ数 178ページ
3. 書名 Thinking About Oneself (Chapter 9: Bodily origin of self-reflection and Its socially extended aspects, Shogo Tanaka)	

1. 著者名 Olga Louchakova-Schwartz (Ed.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer Nature	5. 総ページ数 339ページ
3. 書名 The Problem of Religious Experience (Chapter 2: Reconnecting the self to the divine, Shogo Tanaka)	

1. 著者名 Shogo Tanaka (共著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge (London, UK)	5. 総ページ数 458(担当 pp. 271-283)
3. 書名 G. Jovanovic, L. Allolio-Naecke & C. Ratner (Eds.) The Challenges of Cultural Psychology (担当: Chapter 17: The self in Japanese culture from an embodied perspective)	

1. 著者名 ステファン・コイファー, アントニー・チェメロ (田中彰吾・宮原克典共訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 293
3. 書名 現象学入門: 新しい心の科学と哲学のために	

1. 著者名 田中彰吾	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 生きられた 私 をもとめて - 身体・意識・他者	

1. 著者名 ダレン・ラングドリッジ (田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子訳)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 268ページ
3. 書名 現象学的心理学への招待 - 理論から具体的技法まで	

1. 著者名 トマス・フックス (田中彰吾訳)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 228 (第4章は31ページ)
3. 書名 石原孝二・信原幸弘・糸川昌也編『精神医学の科学と哲学』(第4章「現象学と精神病理学」)	

1. 著者名 田中彰吾	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 生きられた 私 をもとめて - 身体・意識・他者	

1. 著者名 黒木幹夫・鎌田東二・鮎澤聡（編）	4. 発行年 2015年
2. 出版社 ビイングネットプレス	5. 総ページ数 253
3. 書名 身体の知（担当：田中彰吾「心身問題と他者問題」pp.134-153）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Embodied Approach (英語) http://embodiedknowledge.blogspot.com/ Embodied Approach (日本語) http://embodiedapproachj.blogspot.jp/ Shogo Tanaka (個人ホームページ) https://sites.google.com/site/shgtanaka/home 田中彰吾 (機関ホームページ) http://www.u-tokai.ac.jp/staff/detail/MDEwMDMw/MjMxOTkx

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	浅井 智久 (Asai Tomohisa) (50712014)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	伊東 貴之 (Ito Takayuki) (20251499)		
研究協力者	犬塚 悠 (Inutsuka Yu) (80803626)		
研究協力者	今泉 修 (Imaizumi Shu) (60779453)		
研究協力者	植田 嘉好子 (Ueda Kayoko)		
研究協力者	金山 範明 (Kanayama Noriaki) (90719543)		
研究協力者	河野 哲也 (Kono Tetsuya) (60384715)		
研究協力者	嶋田 総太郎 (Shimada Sotaro) (70440138)		
研究協力者	弘光 健太郎 (Hiromitsu Kentaro) (00849193)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮崎 美智子 (Michiko Miyazaki) (90526732)		
研究協力者	宮原 克典 (Miyahara Katsunori) (00772047)		
研究協力者	村田 憲郎 (Murata Norio) (80514976)		
研究協力者	村田 純一 (Murata Junichi) (40134407)		
研究協力者	森岡 正芳 (Morioka Masayoshi) (60166387)		
研究協力者	渡辺 恒夫 (Watanabe Tsuneo)		
研究協力者	アタリア ヨハイ (Ataria Yochai)		
研究協力者	チャーチル スコット (Churchill Scott)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フックス トーマス (Fuchs Thomas)		
研究協力者	ギャラガー ショーン (Gallagher Shaun)		
研究協力者	ラングドリッジ ダレン (Langdridge Darren)		
研究協力者	李 維倫 (Lee Wei-Lun)		
研究協力者	ニーチェ マルティン (Nitsche Martin)		